

---

# 通学電車

このはな さくら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

通学電車

### 【Nコード】

N7184S

### 【作者名】

このはな さくら

### 【あらすじ】

「なぜ君はわたしの隣に立つの？ 空いている場所は他にたくさんあるのに」 毎朝同じ電車に乗り合わせる彼と彼女。お互い言いたいことがあるけれど伝えるすべはない。ところが、今日はちがっていた。

頭のうしろで電車の扉がひらく音がしたら、うなじをかすめるように風が動くのを感じた。

床をキュツと踏み鳴らし、足音がだんだん近づいてくる。

あつ、あの人だつ。

制服のポケットからハンカチを取り出して急いで口元を覆うと、わたしはうつむいて息をとめた。

どうしてなんだろう。

彼と同じ空気を吸っていることがわかると、鼻がムズムズしてクシャミがでそうになる。

ダメだって、こっちに来ちゃダメっ。本当にでちゃうからっ。

必死になって心の中で祈ったのに。

今日も風は、わたしの隣で止まってしまった。

ブーンというモーターの音が低くうなるまでの間に、彼の弾んだ息が届いて、わたしの頭のとっぺんにある髪を揺らす。

お願い、はやく動いて！

けれど、思いとは裏腹に、電車はなかなか出発してくれそうにな

くつて。

パチパチと何度もまばたきを繰り返していたとき、やっと規則正しく体が揺れはじめた。

なぜ君は、わたしの隣に毎日やって来るの？

車内はガラガラで、座る場所だって他にたくさんあるのに。

わたしの隣のスペースは、君のために空けてあるんじゃないんだよ。

吊り革がギシツときしんだ拍子に、胸がキュツと痛む。

さらに強く、つま先に目を落とした。

\*\*\*

薄いブルーのハンカチで顔をかくし、痛いぐらい耳たぶを真つ赤にさせながら下を向いている彼女。

通学電車が一緒になってからずっと、未だにオレは彼女の素顔を

全部見ていない。

オレが今、目にしている彼女のパーツは、さらさらの黒髪と、やわらかそうな耳たぶと、長いまつげの下で潤ませている丸い瞳だけだった。

ああ、まだある。桜色をしたキレイな爪の先と、紺色のスカートからチラリと覗く膝小僧も、絶対ハズせない。

はっ、やっべー。マジやばい、っつーの！

すぐさまスケベ根性丸出しの視線に気づいたオレは、あたふたと窓を見た。

ピリピリとした気まずさを感じながらも、オレの横に並んで窓に映っている彼女の姿をながめる。

いつからだろう、彼女をさがして、隣に立つようになったのは。

彼女は、オレと同じ高校生であることは間違いないだろうけど。

たった一駅の間だけの、この電車に間に合うためだけに、オレは毎朝駅まで走るのだ。

だが、オレと彼女との間にあるのは、沈黙による静けさと電車が揺れる音。共通点などさがしようにもなく。

彼女を見つめるオレの足の下では、車輪の音が重く響いていた。

それが、今日はどういいうわけか異変が起きた。

カーブに差し掛かり電車が傾いたと思ったら、ガクンと大きく揺れたのだ。

オレは、吊り革につかまっていたため、うまく対処できたのだが。

「きゃっ!」

彼女が揺れに耐えきれず、オレの方によるめいた。

「あっ、ちょっと!」

とっさに手をだして、彼女の体を横から抱きかかえる。

パチン、とシャボン玉が割れるがごとく、レモンの香りがオレの鼻先で匂った。

しまった、彼女の匂いだ。

カーツと顔が火照り、変な汗がジワリと滲むがわかる。思わずツバを飲み込んでしまった。

\*\*\*

電車が揺れた拍子に転びそうになったので、足で踏ん張ろうとした。でも、間に合わない。

あ、倒れる！

と思った刹那、わたしは強い力で体を支えられていたことに気づいた。

狭い通路で転倒しなかったのはよかったけれど、ホツとしたら今度は恥ずかしさでいっぱいになって、泣きたくなくなってしまった。

隣に立っていた彼が、わたしの腰を抱えて倒れないようにしてくれていたのだ。

やだ、どうしよう。

体にまわされた彼の腕を意識しすぎて、グルグルと目がまわりそう。

さっきまで持っていたハンカチは、床に落としたままだった。とても拾う余裕がない。

「だっ、だいじょうぶか？」

震えるようにうわずった声が、頭上から降ってきた。

ふと視線を動かすと、わたしの視界は彼の制服のシャツの色でふさがれていた。まぶしい白。

そして、「あっ」と言う声が自然にでて、こわばっていた頬の筋

肉が緩んだ。

わたしのリップの色が、彼の白いシャツにシミをつくっていたのだ。

まぶしい白の真ん中に、ピンク色のくちびる。わたしの大好きな、レモンの匂い。

あやまらなくちゃ！

「あ、あのっ」

指でピンとはじかれたように顔をあげた。彼と目が合う。

輪郭のふちがくつきりとした目が、戸惑いを隠せずに、わたしを見つめ返していた。

彼の顔のまわりに陽があたって、細かい粒子が空中に漂っていた。

それは、タダのホコリにきまっているんだろうけど。

不思議なことに、わたしにはキラキラ光る結晶のように見えた。

\*\*\*

うつむきがちだった彼女が、急に顔をあげてオレを見た。ブルー

のハンカチは、どこにもない。

「えっ？」

オレは、初めて彼女の素顔を目の当たりにして、驚きの声をあげてしまった。

レモンの香りが、彼女のくちびるから匂う。

レモンといっても、目に染みるほどキツイ本物の匂いではない。人工的につくられた、ニセモノのレモンの、ゆるくて甘ったるい匂いだ。

窓から入ってくる日差しを、映しているのだろう。彼女の瞳の中にチラチラと光るものがある。

「じっ、ゴメンなさい……わたし……」

ウイスピー・ボイス。

「あの……シャツに、リップ……つけちゃったみたい」

消え入りそうな小さな声で言いながら、顔をちよつと横に傾けて、ぎこちなく笑う。

「はあっ？」

思いがけない告白に不意を突かれて、オレは声が裏返ってしまった。あわててシャツを見下ろしてリップの跡をさがす。

リップは、ちょうどオレの胸のあたり、心臓の真上の位置にあっ  
た。

神様がくれた、チャンスかもしれない。

彼女にかける言葉をさがしながら、オレは顔をあげた。

) E N D (

(後書き)

読んでくださってありがとうございます。いりました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7184s/>

---

通学電車

2011年4月30日13時07分発行